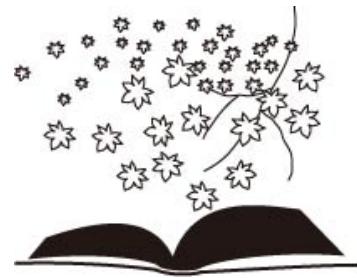


# ☆☆図書室だより☆☆ ☆第17号☆

## ☆☆- 図書委員会よりお知らせ -☆☆



2014年 7月(後期)～2014年 8月 新規登録の書籍をご案内します

書名(購入書)	著者名など	出版社	分類シール
アンのゆりかご 村岡花子の生涯	村岡恵理 著	新潮文庫	[黒] 910.268 Mu ]
赤毛のアン モンゴメリ 著 村岡花子 訳	新潮文庫	[黒]	933.7 Mo ]
よく生きよく笑いよく死と出会う アルフォンス・デーケン 著	新潮社	[黒]	114.2 D ]
<hr/>			
書名(ご寄贈書)			
それでも人生にイエスと言う V.E.フランクル 著 山田邦夫 他訳	春秋社	[黒]	146.8 Fr ]
「おめでとう」で始まり 福祉とキリスト教 市川一宏 著	教文館	[茶]	197.6 I ]
「ありがとう」で終わる人生 「なぜ」と問わない 山浦玄嗣 著	日本キリスト教団出版局	[黒]	369.31 Ya ]

(…裏面へつづく)

### ご紹介…

棚村恵子 先生より

#### 『それで人生にイエスと言う』 V・E・フランクル著 春秋社

本書は3年前の大震災以後、静かなブームとなっているという。そうだろうなと思う。著者はユダヤ人の精神科医で、第2次大戦中にナチスによって強制収容所に入れられ、人間の極限状態を経験した。それをもとに人間と人生を深く洞察した本書は、困難にも関わらず、一回限りの人生を意味あるものにしたいと願うすべての人の心深くに語りかける。

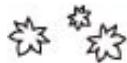
私達は大震災後、フランクルの言う「人生からの問い」に個人としても国としても直面し、「それでも人生にイエスと言う」ことができるのか、と自問してきた。フランクルは「生きることは課せられた仕事」なのであり、私たちは苦悩を通して人生から問われている存在だと言う。苦難の中で、とかく私たちはなぜ?と問うが、神が私たちに問うておられるという本書の考えはユニークであり、前を向いて歩もうとするすべての人を励ますに違いない。

#### 創立90周年記念全体修養会にむけて 図書委員会よりおすすめの一冊 今日の一冊

#### 『アンのゆりかご』 『赤毛のアン』

NHK朝の連続テレビ小説の原案です。愛島の道雄を失った花子は普遍の愛を知りました。日本中の子供たちに上質の家庭小説を翻訳する道を天から与えられたのです。教文館でともに働いた、カナダ人宣教師ミス・ショーは、各国の出版物を通して世界はひとつになるといい、※“我々は一国の良書を他国に紹介して国民と国民とをもっと接近せしむべく文学を通して大に努力するものである”と伝えました。しかし戦争は激しくなり、日本を去るミス・ショーから手渡された「アン・オブ・グリン・ゲイルズ」を必ず翻訳すると、日本の子供たちに伝えると花子は約束します。花子は「赤毛のアン」の原稿を灯火管制下に書き続け、戦後1952年に夢や希望の象徴として刊行したのです。ページを捲ると、これが戦中に訳された文章だととても信じられません。戦火に負けなかった訳業は、キリスト者としての花子の使命であり、友情の証でした。※『アンのゆりかご』※p.272, (図書委員 M.I.)

## 『「おめでとう」で始まり「ありがとう」で終わる人生 福祉とキリスト教』



市川一宏 著

教文館

本来はもっとも安心して生活し、その子らしくのびのびと育っていくべき家庭で起こる虐待。また孤立や孤独死の問題が広がり、毎日のように起こる人身事故。今の社会は明らかにおかしい。

本著は、困難に直面しているたくさんの方々、そしてその方々を支援している人材が疲弊している現実に、居ても立ってもいられず、今までに書いたものを書き改め、まとめた本です。

誰もが神様から祝福されて命を与えられたという事実に一切の疑いをはさむ余地はありません。だからこそ、一人ひとりの誕生を祝福し、「おめでとう」という。そして人生の最後にあって、その時まで世話をしてくれた人々に「ありがとう」と言う。一人ひとりの人生を支えるという福祉の原点を確認することが、今、大切だと思っています。

12年間担ってきたルーテル学院大学学長としての役割を終えてすぐに背中に帯状発疹ができたのは驚きでした。本著は、痛みと闘いながらまとめた本ですから、なおさら愛着があります。  
(K.I.)



## 『「なぜ」と問わない』(TOMOセレクト 3・11後を生きる)

山浦玄嗣 著

日本基督教団出版局

著者は新約聖書をケセン地方の言葉にわかり易く翻訳されたことで有名な医師である。

彼の住む大船渡市が、3年前3月11日の地震津波によりヘドロとガレキの山の壊滅状態となつた。彼は、医者として大勢のけが人病人を来る日もくる日も診続けた。家のみならず仕事も家族も亡くした住民たちと対話しながら共に涙を流したと、記録の中に書かれている。そんな彼に、東京から来た報道陣達は「善良でよく働く東北の人々がなぜこんな酷い目に合わなければならぬのか」と考えても見なかつた質問に戸惑い、怒りを覚えたという。彼のまわりの住民達はみな互に助け合いながら、毎日休む暇なくガレキの山をかたづけるのに生活する場を立て直すのに必死で働いている。「なぜ」などと考える暇も心の余裕もない。そんな文句を発する者は一人もいない。

「なぜ」と問うこと自体意味がない。「明日という日は明るい日と書くのさ！」と締めくくる言葉に、逞しく生きる人々の姿を見た。(図書委員 N.K.)



## 『よく生き よく笑い よき死と出会う』

アルフォンス・デーケン 著

新潮社

6月22日、90周年記念講演会の題は、この本の題と同じでした。語られた内容は、この本にほとんど網羅されている。人生の秋に、病や入院、介護、そして愛するものとの別れ、自らの死・・・そんな中で、どうしてよく笑うことができるのだろうか。

デーケン師は、オランダとの国境に近いドイツ北部の町で育った。師が13才のとき終戦になり、ドイツは敗戦国となつた。進駐軍がその町にやって来る日、師の祖父は、シーツを切って白旗を作り歓迎の意を表そうと待っていた。ところがどうしたことか、家の前で白旗を持って立っていた祖父に、連合国の兵士がいきなり発砲したのである。数時間後、進駐軍は各戸の点検のため再びやって来た。幼い師は、そのとき“汝の敵を愛せ”という聖句を思い出し、震える手を相手に差出し「ウェルカム」と言った。その瞬間が、彼にとって「カイロス」、つまりキリスト者として生きようと誓った決定的な瞬間になったのだ。(図書委員 M.T.)

(…つづき)	書名(ご寄贈書)	著者名など	出版社	分類シール
三陸つなみ いまむかし	元NHK記者 半世紀の取材メモから	山川 健 著	イー・ピックス	[黒 369.31 Ya]
日本基督教団	教憲教規および諸規則	2013年5月改訂		[茶 195.2 N]